

ばらの栽培と鑑賞

石田文三郎

初夏の花としては牡丹、芍薬、グラジオラス、ダリア、躑躅などあるが、なんといつても薔薇のように芳香もあり、色彩もよく、品位もあり、春から秋まで咲く花は他になかろうと思う。

薔薇は戦前日本でも相当栽培する人もあり、薔薇会などもあつたのですが、大東亜戦で一時休止の止むなきに至りましたが、終戦によつて米英軍の進駐あり、それと共に薔薇の栽培が再び流行し、各地に薔薇会が出来、北海道札幌なども各所の家庭で薔薇を植栽することが流行してきたので、少しく薔薇の栽培について記することにいたします。

種類
薔薇の種類は蔓性種、叢性種、矮性種の三つに分けることができる。蔓性種は垣根にしたりアーチにしたり棚作にしたりいたします。叢性種は主として垣根用に用いております。矮性種は昨今薔薇の代表的のもので、この中にはハイブリットテイ種、ハイブリットパーピチアル種、チャイナ種、テイ種、矮性ポリアンサス種等はこの中にあつて、ハイブリットテイ種は一番多く栽培されている種類である。

氣候

薔薇は元来が温帯の産で日当を好む植物であつて、北海道では冬期少々寒過ぎるよう思うれませんが、それでも一日中五時間も日が当つて北風をあまり受けない暖かい風通しのいい南向きの場所であれば、北海道でもさほど困難のものでもありません。しかし冬期の寒さには防寒の施設をいたさなければ、種類によつては越冬することができぬものもあります。

土質

薔薇を植込む場所が決つたなら、その土質を調べなければなりません。普通肥沃で排水の良い土であれば栽培できますが、薔薇の最も好む土質は保水力のある粘質壤土で排水の良い土地が一番適しております。もしこのような土質で無く、砂地や泥炭地等の場合は、他から粘質壤土または少々赤土混入のものを求めて客土すればよいと思ひます。その客土の方法は、薔薇を

植込む株の周囲を二尺ぐらい円形に深さ二尺五寸ぐらいに土を掘り取つて、その中には良い土を入れ替えてやればよろしいわけです。この際排水の悪い場合は、下に小石を少々入れることも排水を計ることになります。

薔薇の肥料

ばら栽培の秘訣は、土質や苗の良否、植込の時期その他剪定の方法などにもよりますが、主として肥料の種類及びその施す時期、分量、方法などによることが多いと思

います。そのばらに適する肥料について述べれば、
牛糞と馬糞
牛糞はばら栽培の肥料として最もよいもので、特に土質のやわらかい土地に適し、また粘質壤土のごとき土地には馬糞の方が良く、牛糞も馬糞も共に三、四カ月たつたもので腐熟したものをを用いるようにしなければなりません。

乾燥肥料—ばらの乾燥肥料の作り方

魚粕二升、油粕二升、骨粉二升、米糠二升、土四升（普通の畑土または赤土）を混合し、如露で水をそそぎ湿気をふくませ、日の当る地面に積み、上から藁で覆い、酸酵が盛んになつたら再び混ぜ、如露で湿気を含ましてからさらに積み、藁で覆つておけば一カ月ぐらいで酸酵が終る。これで乾燥肥料はできたのであるから、雨の当らぬ所へ函などに入れて貯蔵します。
木灰または露灰
木灰はストーブなどでできた灰がよいのであるが、相当量使うので、落葉や芥などを焼いて黒色に灰になつたものを、雨の当らぬ場所に保存すればよい。露灰は木灰より効力が少ないので、使用の場合は木灰の倍量ぐらい使わなければなりません。

液肥原液

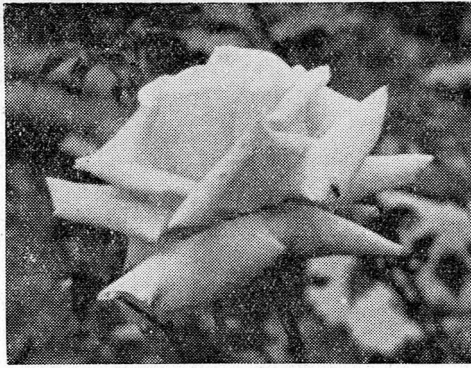
液肥は主として追肥として使用するもので、その調製方法は魚粕一升、油粕一升、米糠二升、人糞尿の腐熟したもの五升、ほかに水一斗を入れ、この割で三カ月以上醗酵させたものを、使用する際はさらに十倍以上にうすめて使用します。



サンフェルナンド

薔薇花壇苗の定植

ばら苗の定植の時期は、東京附近では秋の十一月頃が適期ですが、北海道は春の四月下旬から五月初旬が植込みの最適期です。その定植の距離は、矮性種すなわち四季咲種等にあつては、株間は三尺四方に一本の割合が適当で、ここに植穴を掘ることになります(客土の時と同じ大きさで深さ)。その大きさは二尺四方四角形に深さ二尺ぐらいの穴を作り、その中に肥料の時述べ



ダイヤモンドジュビリー

た牛糞か馬糞の腐つたものを六、七寸の厚さに入れ、さらに乾燥肥料すなわち魚粕、油粕、骨粉、米糠等の混合肥料を一株に三合くらいを入れ、それと同時に木灰を二合乃至三合を撒き、これらのものをよく混ぜ合わせて後、足で軽く踏み、掘つた土を五、六寸の厚さにかぶせ、ここに薔薇苗を植えることとなりますが、苗は北海道ではなるべく二年生苗で根の完全によく出てい

るので、不用の枝や根のあるものは缺で適当に剪定してから植込みます。植込む場合、根が直接元肥にふれないように、掘げて、薔薇の台木と接口が地表に出ぬよう、また深植にならぬよう注意して、地表面より少々土を高くかけてやります。このように深く植穴を掘つて、馬糞や牛糞その他乾燥肥料、木灰等を穴の底に沢山入れるという事は薔薇は一度植え込めば何年も植換えないということと、ばらの根は相当深く根が張つて養分を吸収するというところから、このように植穴の底に多数の元肥を施すわけです。苗が植え終つたなら、十分根元に灌水いたします。

追肥の施し方

定植したものや前の年植込んだものは、五月中旬になると芽が伸び初めます。この時期から追肥として液肥(前肥料の項で記載のもの)を十倍乃至十五倍にうすめて、一株に五合くらい、株の繁茂の状態によつてその量を加減して、十日に一回ぐらいの割合で施し、糞が十分色づいたら、花の散るまで一旦施肥を中止します(大体この間六月中ぐらい施肥を休む)。七月下旬に至れば花も一時開花を中止するので、再び追肥を施す。この場合、液肥を二十倍ぐらいうすめて、量を少々多く一株六合ぐらいの割合で十日に一回ぐらい施せば、植込んだ年からよく繁茂して見事な花を観賞する事ができます。

摘蕾

新芽が四、五寸伸びると蕾が出て来ます。この場合種類によつては一枝一花のもの

のあるが、普通花蕾が二個以上数個も出て来ます。この際、中央にある完全の蕾一個を残し、他は小さい時に指先で取除かぬとよい花は咲きません。

砧木の除去

薔薇苗は普通接木苗が多いので、六月頃になつて盛んに芽の伸びる頃、根元の砧木から砧芽が出て来ます。これを見つけた次第取り除かぬと接芽が伸びんばかりか、よい花は咲きませんから、見つけ次第取る必要があります。

鑑賞

ばらの鑑賞は、花壇に咲かせて眺める場合と、満開前に切花とし部屋に挿して眺める場合、鉢植として眺める場合、蔓ばらのときはアーチを作つて眺める場合等色々あります。花壇を作つて眺める場合は色の配合をよく考え、また繁茂する種類を後方に、丈のひくき種類を前方になるように植込まなければなりません。切花は枝をあまり長く切つて挿すと親株の発育を害するので、切花の枝の長さは葉を二、三枚着けた程度で切るべきです。鉢植の薔薇を鑑賞する場合は、戸外に棚等に陳べて鑑賞する場合は、部屋に取り入れて鑑賞する場合がありますが、部屋の場合、花が散つたら直ちに外に出すべきです。部屋に長く置けば置くほど樹の発育を害するものです。

薔薇の病蟲害

黒點病 ばらの病氣の中で最も普通のもので、よく発生する病氣です。この病氣は薔薇の葉が出る頃、黒褐色の円い斑点が根元に近い葉から出て、その葉は黄変して後

落葉してしまいます。病氣は八月、九月が一番発生します。

この病氣を防ぐには、春開葉と同時に三斗式ボルドウ液を十日乃至二週間おきに散布することによつて発病を防ぐことができます。しかし、開花前にボルドウ液を散布すると莖葉に汚染を生じ美観を害するので、この点注意することが必要です。

ウドンコ病 この病氣も普通の病害で、若い葉や蕾に白粉を散らしたような病斑ができることからウドンコ病と称し、ひどい時は花まで発生することがあります。とくに高温多湿の場合発生し易い。年によつて相当の被害を受けます。

これを防ぐには、石灰硫黄合剤の八十〜百倍液の散布によつて防ぐことができるが、少なくとも発病のものは二、三回の散布が必要です。

アブラムシ 薔薇のアブラムシは新芽の発芽時より秋の冬囲いまでいつでも発生する害虫で、繁殖力も甚だしい。これを駆除するにはニコチン剤、除虫菊乳剤などで駆除しておつたが、最近ではロゼゾール剤の八百倍乃至千二百倍液を数日間隔で二、三回くり返し噴霧器で散布すれば駆除することができます。

アカダニ 普通、花や蔬菜に着く害虫でありながら、虫が細小のため見逃がされ易い虫で、薔薇には六月頃から八月頃まで、乾燥期に葉の表面から見て白味を帯び弱つたような感じになつた場合、葉の裏面を拡大鏡で見ると、小さい虫が活潑に動いているのを見る時はアカダニの発生で、ばらは

非常に株が弱つて花なども小さくなる。

この虫を駆除するにはアブラ虫と同様ロ
デゾール剤の八百倍液を葉の裏面からかか
るよう噴霧器で二、三回撒布すれば駆除す
ることができませす。

介殼蟲 この害虫は、薔薇のみならず他
の植物にも発生して被害を与えるものであ
ります。薔薇には枝幹に多数附着して、殼
は虫の製出物で、この殼の中に雌虫が生息
し、薔薇の樹液を吸取して加害するもので
ある。この虫の駆除は六、七月頃幼虫発生
期にネオン剤、ロデゾール剤等の六百倍液
を歯ブラシに浸し貝殻を摩擦し駆除する
か、石灰硫黄合剤の百倍液を害虫の附着幹
へ塗布することによつて駆除することがで
きます。

このほかチュウレンジバチ、バラクキバ
チ、ゾウ虫類、ユガネムシ等の被害を蒙る
ことがあるが割合に少ないので略します。

薔薇の冬囲い

冬囲いは東京以南ではわりに行ふ必要は
ありませんが、北海道のごとき寒地では冬
囲いの必要があります。その方法は、十一
月頃枝の長く伸びすぎたものは適当に剪定
し、株の根元に四、五寸の高さに土を盛り、
その上に落葉を集めて覆いさらに根曲竹を
三方に一本ずつ立て、その先端を一カ所に
集めて縄で結び、その上を藁で覆つて、薔
薇の枝が藁より外に出ぬよう土木縄で囲つ
てやればよろしいです。この竹を立てるこ
とは雪のために薔薇の枝や幹が潰されぬよ
うするのであるから、なるべく地面に深く
挿し込み、しかも丈夫な竹を立てることが

必要であります。

そして冬囲いは春の雪どけ後四月中旬か
ら下旬頃藁を取つてやらなければなりません。

剪定

春、雪どけ後、冬囲いを取つたなら直ち
に枝の剪定が必要です。この剪定は、良い
株に仕立てることと、よい見事な花を多数

く咲かせることにあります。

その剪定の方法は、冬囲中昨年秋未熟な
枝は寒さのため枯死するものもあるから、
これは適当なところから剪定し、なお密に
混み合った内側や下枝で細かい枝は、枝の
付根から剪定し、中でも主な枝でよく充実
し、長く伸びた枝は、その枝の芽を三、四
芽残して剪定すれば、その残した芽から強

菠薐草の優良種バイキング

雪印藤の沢育種場

菠薐草バイキング Viking は弊社が昨年
始めてデンマークより輸入紹介した品種
で、試作の結果、市場並びに生産者の大好
評を博し、その特性から今後の菠薐草栽培
にとつて極めて注目し値する推奨すべき優
良品種であると思う。

元来菠薐草は、酸性土壌を除いて極めて
作り易い蔬菜であるが、冷涼湿潤な気候を
好み、長日に極めて敏感で、日の長い時期
に播くと臺立が早く、高温乾燥に弱い性質
をもつてゐる。比較的寒さには強く、北海
道の積雪下でも大部分の品種が良く越冬す
るものである。

従来北海道の市場では、厳寒から初春ま
でと、七、八月の盛夏の候が菠薐草の端境
期であつた。冬は秋の貯蔵もの内地もので
補い、初春ものはミンスターランド種等を
秋播して、早期融雪地帯もしくは人工融雪
等による早期出荷をもつて補われていた。
夏ものはキングオブデンマーク、ミンス

い新芽が伸びて秀麗な花を咲かせることが
できます。素人は枝の剪定を惜しんで、小
枝でも数多く茂つておれば花が咲くように
思う人があるが、これではいたずらに枝ば
かり繁茂して、見事な花を咲かせることは
できません。

(筆者は北海道大農助教授、北海道大
附属植物園主任)

ーランドが用いられ、八月中、九月に出荷
された。これらの栽培様式が蔬菜専業家に
とつて重要な経営面を占めていたと思われ
る。ところが、近年輸送園芸が進んで、嚴
寒の候から初春にかけて府県産のものが、し
かも新鮮な状態で入荷するようになり、秋
播早春出しの栽培が大きな打撃を受けるに
まつて來ている。

夏出荷の菠薐草品種の条件として、長日
でしかも高温の時期に栽培するのであるか
ら、全く抽臺を見ないキングオブデンマ
ーク種のように耐暑性にも富む品種が選ばれ
てゐる。しかしながら、この時期の栽培は
発芽が困難であり、べト病が出易く、むれ
たり、管理にもなかなか手間のかかるもの
で、もちろん他の栽培時期よりも多肥しな
ければならぬ等の点から、特殊環境を除い
て単作よりはむしろ間作形式が多く取入れ
られてゐる。間作した場合、後作に白菜等

を作るとすれば、その生育日数が問題にな
る。これらの点から見て、一層バイキング
は有望な優良品種であると考えられる。
バイキングは形状ノーベルに似ている
が、ノーベルに比較し、遙かに生長早く、
大株となり、したがつて収量が多い。また
厚肉で縮み少く、品質、風味まことに優良
である。葉色はノーベルより僅かに濃く、
葉は丸味を帯びて広さ一七、一七、長さ
一七、二二種、葉柄は短く、立性で、市場
として、また家庭用としても優れている。
また本種は耐暑性が強く、キングオブデン
マークに次ぐ品種と称され、当場の試作成
績の結果もノーベルに比し一週間抽臺遅
く、發育極めて良好であつた。札幌市上白
石の蔬菜篤農家坂東氏の夏播した結果によ
ると、耐暑性はキング同様すこぶる強く、
盛夏の發育すこぶる旺盛で、七月十三日葱
頭の間作播として八月十二日より収穫し始
め、同時期に播いたキングオブデンマーク
より一週間より十日ぐらゐ早く収穫を了
え、相当の収益を挙げられ、特に本種を賞
讃しておられる。

以上のようにバイキングは春播、夏播種
として極めて有望な優良品種で、特に各方
面御試作されることをお奨めする次第で
ある。筆者は雪印種株式會社、中原忠夫